DOI：10.20776/S24364231-48-P165

William Butler Yeatsの死生観――「ビザンティウムへの船出」（1927）と「ビザンティウム」（1930）における鳥の表象を巡って

W.B. Yeats's View of Life and Death:
On the Representation of Birds in "Sailing to Byzantium" (1927) and "Byzantium" (1930)

尾澤　愛子*
OZAWA Aiko

要旨　William Butler Yeats（1865-1939）の二つの詩、「ビザンティウムへの船出」と「ビザンティウム」には、いずれにも、黄金で造られた鳥が登場する。黄金で造られた鳥が、黄金の枝に止まって、鳴く、という点で二つの鳥は類似している。しかし、「ビザンティウムへの船出」の金の鳥は、皇帝の目をさまさせ、ビザンティウムの貴族たちや、貴婦人たちに過ぎ去りしこと、過ぎつつあること、これから来ることを歌っては聞かせる金の鳥である。金の鳥は、明るい静かな世界、魂の永遠性の表象である。それに反して「ビザンティウム」の金の鳥は、冥界の雄鶏のように鳴き、冥界の使者として描かれている。騒がしい暗い世界、肉体の再生の表象である。二つの詩の題名にビザンティウムという地名が使用されているので、「ビザンティウム」は「ビザンティウムへの船出」と対を成し、「ビザンティウムへの船出」の後続詩とみなす説が多い。イェイツの友人、トマス・スタージ・ムア（Thomas Sturge Moore）が「『ビザンティウムへの船出』の第４連の金の鳥の描写には失望した」と言ったことに、イェイツが反論して「ビザンティウム」を書いたことは、広く世に知られているからである。イェイツにとってビザンティウムは、詩人として憧憬の地であり、イェイツは、『幻想録』（*A Vision*）（1925）で、「初期のビザンティウムは、記録された歴史において、後にも先にもあり得ないほどに、宗教生活、審美生活、実生活が一体をなしていた」と讃美している。本稿では、二つの詩に現われる「金の鳥」を、一方が魂の永遠性の、他方が肉体の再生の象徴として、イェイツの死生観を明白に示すものであることを論じる。

はじめに

本論は、イェイツの「ビザンティウムへの船出」と「ビザンティウム」の二つの詩の中の金の鳥の表象を巡って、一方が魂の永遠性を、一方が肉体の再生を象徴し、イェイツの異なる死生観を表わすものとなっていることを論じる。

「ビザンティウムへの船出」は、1926年の秋、イェイツが61歳の時に書き始められた（Jeffares *New Commentary* 211）。イェイツは、この詩を1927年に完成させ、詩集『塔』（*The Tower*, 1928）に収め、発表した。イェイツは、自註で、「私は、ビザンティウムの宮殿で、金と銀で造られた枝に止まって鳴く、人工的に造られた鳥の話を何処かで読んだことがある」（"I have read somewhere that in the Emperor's palace at Byzantium was a tree made of gold and silver, and artificial birds that sang."）と述べている（*Collected Poems* 459）。

＊千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程

「ビザンティウム」は、イェイツが65 歳の1930年の 9 月に書かれ（Jeffares, *op. cit.* 293）、詩集『螺旋階段とその他の詩』（*The Winding Stair and Other Poems*, 1933）に収められ、発表された。金の鳥は、「再生の使者」（The heralds of rebirth）として描かれている。（Snukal 118）.

1．［ビザンティウムへの船出］

「ビザンティウムへの船出」の詩は、 4 連、32行で構成されている。拙訳を付す。

Sailing to Byzantium

I

That is no country for old men. The young
In one another's arms, birds in the trees,
－ Those dying generations － at their song,
The salmon-falls the mackerel-crowded seas,
Fish, flesh, or fowl, commend all summer long
Whatever is begotten, born, and dies.
Caught in that sensual music all neglect
Monuments of unageing intellect.

II

An aged man is but a paltry thing,
A tattered coat upon a stick, unless
Soul clap its hands and sing, and louder sing
For every tatter in its mortal dress,
Nor is there singing school but studying
Monuments of its own magnificence;
And therefore I have sailed the seas and come
To the holy city of Byzantium.

III

O sages standing in God's holy fire
As in the gold mosaic of a wall,
Come from the holy fire, perne in a gyre,
And be the singing masters of my soul.
Consume my heart away; sick with desire
And fastened to a dying animal
It knows not what it is; and gather me
Into the artifice of eternity.

IV

Once out of nature I shall never take
My body form from any natural thing,
But such a form as Grecian goldsmiths make
Of hammered gold and gold enamelling
To keep a drowsy Emperor awake;
Or set upon a golden bough to sing
To lords and ladies of Byzantium
Of what is past, or passing, or to come.

1927

ビザンティウムへの船出

I

あれは老人たちの国ではない。
抱き合う若者たち、林の中で鳥たちは歌う。
―死ぬ世代の者たち―
鮭が登る滝、鯖が群がる海、
魚、獣、鳥は夏の間
はらまれ、産れ、死んでいくものを讃美している。
すべてが、官能的音楽に捉えられ
老いることがない知性の記念碑をなおざりにしている。

II

年を老いた者は、本当につまらないもの。
棒にかけられた、ぼろの上着と同じだ。
もし、魂が手をたたいて歌うこともなく、
死ぬべき運命の服を着て
ぼろの上着が声高く歌うことがないのなら
そこは歌を学ぶ所ではなく記念碑自体の壮大さを学ぶことしかできない
それゆえ、私は、船出をし、幾つかの海を渡り、
聖なる都、ビザンティウムへやってきた。

III

神の聖火の中に立っている賢者たちよ。
ああ、金のモザイクの壁画のように
聖火から輪を描いて舞いながら出てきて
私の魂の歌の師となって下さい。
私の情念を焼き尽くして下さい。
魂は、欲望のために病み、死ぬべき動物に繋がれ

自分が何であるかわからなくなっている。
どうぞ、私を永遠の工芸品に組み込んで下さい。

IV

私は、一度、体をはなれたならば、
再び、どんな自然からも、私を取り戻すことはしません。
ギリシャの金細工師たちが、金の槌で延ばした
黄金と金のほうろう細工で造られた姿、
皇帝の眠りを覚ますもの。また、金の枝に止まって
ビザンティウムへの貴族たちや貴婦人たちに
過ぎ去ったこと、過ぎゆくこと、これから来ること
歌い続ける金の鳥となります。

イェイツは、第 1 連で、アイルランドは若者の国で、62歳の老人の住む国ではないと、ビザンティウムへの船出を理由づけている。エネルギーに満ちた官能的世界を描き、知性の記念碑を重んじるべきだと述べている。第 2 連で、ビザンティウムへの渡航は、詩人として師につきたい、魂を歌いたいと、その渡航目的を明白にしている。単なる、芸術の都への憧憬ではない、と述べている。第 3 連で、神の聖火の中に立っている賢者たちに、聖火から舞い出て、私の魂の歌の師になってほしい、私を永遠の芸術作品に組み込んでほしい、と願っている。魂の永遠性が提示されている。第 4 連で、魂は、ギリシャの金細工師によって造られた金の鳥となる、それは、永遠に詩を読み続けていきたいと願う詩人イェイツの姿である。

2．「ビザンティウム」

「ビザンティウム」の詩は、 5 連、40行で構成されている。拙訳を付す。

Byzantium

The unpurged images of day recede;
The Emperor’s drunken soldiery are abed;
Night resonance recedes, night-walker’s song
After great cathedral gong;
A starlit or a moonlit dome disdains
All that man is,
All mere complexities,
The fury and mire of human veins.

Before me floats an image, man or shade,
Shade more than man, more image than a shade;
For Hades’ bobbin bound in mummy-cloth

May unwind the winding path;
A mouth that has no moisture and no breath
Breathless mouths may summon;
I hail the superhuman;
I call it death-in-life and life-in-death.

Miracle, bird or golden handiwork,
More miracle than bird or handiwork,
Planted on the starlit golden bough,
Can like the cocks of Hades crow,
Or, by the moon embittered, scorn aloud
In glory of changeless metal
Common bird or petal
And all complexities of mire or blood.

At midnight on the Emperor's pavement flit
Flames that no faggot feeds, nor steel has lit,
Nor storm disturbs, flames begotten of flame,
Where blood-begotten spirits come
And all complexities of fury leave,
Dying into a dance,
An agony of trance,
An agony of flame that cannot singe a sleeve.

Astraddle on the dolphin's mire and blood,
Spirit after spirit! The smithies break the flood,
The golden smithies of the Emperor!
Marbles of the dancing floor
Break bitter furies of complexity,
Those images that yet
Fresh images beget,
That dolphin-torn, that gong-tormented sea.
1930

ビザンティウム

昼間の不浄な形象が消えていく
泥酔した皇帝の兵士たちは寝床に入った
大聖堂の銅鑼が響き渡り、その後は
夜の騒ぎは静かになり、歩き回る者たちの歌声は無い

星明かり、月明かりに照らされる大聖堂の丸屋根は
あらゆる人間の現象を
一切の、すべての錯乱を
人間の血潮による凶暴と泥濘を軽蔑する。

私の前を漂うのは、形象か、人間か、幻影か
人間と見れば幻影、幻影と見れば形象
ミイラを巻いた冥界の糸巻きは
曲がりくねった道の糸をほどくかもしれない
唾液も無く、息もしない口は
息の絶えた口を呼び出すかもしれない
私は、その超人を歓呼して迎える
お前を生の中の死、死の中の生と呼ぼう。

鳥とも、金細工ともわからない奇跡の鳥
鳥というより奇跡、細工物というより奇跡の鳥
星明かりのもと、黄金の枝に止まって
冥界の雄鶏のように声高く時をつげる
この金の鳥は、時には月の光に苛立ち
不滅の金を褒め称える、この世の鳥や花びらを
泥濘や血がもたらすこの世のすべての錯乱を
声高く嘲る。

真夜中、皇帝の敷石の上を
火をつけても燃えない炎、火打石でも点火しない炎
嵐に乱されない炎、炎から生まれた炎がとび回る
そこに血から産まれた亡霊たちが集まり
すべての凶暴と錯乱を捨て
姿を消して炎の舞踏となる
恍惚の極み
袖一つ焦がさない炎の極み

海豚の泥のような血に跨って
つぎつぎと亡霊たちが押し寄せてくる
鍛冶場はその潮を砕く
皇帝の黄金の鍛冶場！
鍛冶場の床の大理石は
苛立つ錯乱と凶暴のすべてを打ち砕く
更に新しい形象を産み出す。
あの海豚に裂かれた海を、銅鑼の音に苦しむ海を打ち砕く。

第 1 連で、イェイツは、憧憬するビザンティウムの夜の光景を描いている。星に照らされ、月に照らされている大聖堂の丸屋根は、人間の性のすべてを蔑む、と述べている。第２連で、冥界から出てきた形象、人間、幻影を超人間として歓呼して迎えている。それらを、生の中の死、死の中の生として、歓呼して呼ぶ、と述べ、冥界からの再生を暗示している。第 3 連で、金の鳥が登場する。この奇跡の金の鳥は、冥界の雄鶏のように声高く時を告げる。大聖堂の丸屋根と同様、この金の鳥は、この世のすべての錯乱を嘲笑し、不滅の金を褒めた讃えている。金の鳥の姿は、冥界と不滅の世界を提示している。第 4 連で、すべての凶暴と錯乱が消えた場面が述べられている。浄化された魂は、皇帝の大理石の床の上で舞い、恍惚の極みとなる。第 5 連で、海豚は、古来、霊魂を運ぶ生物とされてきたが、海豚に跨って、多くの霊魂が皇帝の鍛冶場に押し寄せてくる場面が描かれている。

３．「ビザンティウムへの船出」の金の鳥の表象―魂の永遠性

古来、多くの詩人が鳥を題材にして詩を詠んでいる。イェイツの作品にも多くの鳥が登場し、詩集『クール湖の野性の白鳥たち』（*The Wild Swans at Coole*, 1919）を発表している。

イェイツは、「クール荘園とバリリー、1931年」（“Coole and Ballylee, 1931”）の詩の最後の連で「私たちは、最後のロマン派―選ぶ主題は、伝承された高潔と優美だった」（“We were the last romantics―chose the theme / Traditional sanctity and loveliness”）と述べ、イギリス・ロマン派抒情詩人の継承者であることを自認している。イェイツは、イギリス・ロマン派抒情詩人たちの中で、とりわけ、ジョン・キーツ（John Keats）を「貸馬車屋の子で生まれは卑しいが、詩は華麗である」（“The coarse-bred son of a livery stable keeper―/ Luxuriant song”）と讃美している（“Ego Dominus Tuus”162）。キーツは、「ナイチンゲールへのオード」（“Ode to a Nightingale”）の第 7 連で、「不滅の鳥よ！汝は死のために生まれたのではない。/どんなに飢えた世代でも汝を殺すことはなかった。/ この過ぎゆく夜に私が聞いている汝の声は/ 遥か昔、皇帝や道化が聞いた声だ」（“Thou wast born for death, immortal Bird! / No hungry generations tread thee down; / The voice I hear this passing night was heard / In ancient days by emperor and clown”195）と鳥の魂の永遠性を詠んでいる。スーザン・Ｊ・ウルフソンが「イェイツの中に潜在するキーツ、キーツの中に潜在するイェイツ」（“Yeats’s Latent Keats / Keats’s Latent Yeats”）という題の論文を書いているが、キーツとイェイツには、共通の繊細な感性が存在する。両者は、鳥の魂の永遠性を声高らかに歌っている。イェイツの「ビザンティウムへの船出」の金の鳥は、鳴いて皇帝を目覚めさせている。イェイツは、自註で「私は、ビザンティウムの宮殿で、金と銀で造られた枝に止まって鳴く、人工的に造られた鳥の話を何処かで読んだことがある」（“I have read somewhere that in the Emperor’s palace at Byzantium was a tree made of gold and silver and artificial birds that sang.”）と述べている。それをアンデルセンのナイチンゲールの童話と関連づける説も存在する（柿原）。しかしながら、『イェイツと妻ジョージの蔵書』には、アンデルセン童話集は無く、関連性は不明である。

「ビザンティウム」を「ビザンティウムへの船出」の後続詩とする説を唱えるイェイツの友人、トマス・スタージ・ムア（Thomas Sturge Moore）は、４月16日に次のような手紙をイェイツに送っている、「あなたのビザンチウムへの船出は、最初の 3 連は、素晴らしい。だが、第 4 連では失望した。あのギリシャの金細工師によって造られた金の鳥は、ホーマー

やシェイクスピアと同様、皇帝や、貴族たち、貴婦人たちに過ぎ去ったこと、過ぎ行くこと、やがて来ることを歌うということで」（“Your Sailing to Byzantium, magnificent, as the first to three stanzas are, lets me down in the fourth, as such a goldsmith’s bird is as much nature as a man’s body especially if it only sings like Homer and Shakespear of what is past or passing or to come to Lords and Ladies.”）と、イェイツに手紙を書いている（Yeats and Moore 162）。この金の鳥は、魂の永遠性を示す明るいイェイツの死生観の表象である。

４．「ビザンティウム」の金の鳥の表象―肉体の再生

「ビザンティウムへの船出」では「私は、一度肉体を離れたら、再び、取り戻すことはしない。金の鳥となり、永遠に詩を詠み続けていく」と宣言している。しかし、「ビザンティウム」では、ミイラが冥界から現れ、金の鳥は、冥界の雄鶏のように使者として声高く時を告げる。「冥界の雄鶏」の語について、ロバート・スヌカル（Robert Snukal）は、「イェイツは、冥界の鶏が再生の使者であることを、ユージェニー・ストロング（Eugenie Strong）による『神格化と来世』（*Apotheosis and After Life*）を読んで知っていた」（“Furthermore the golden bird is compared with the cocks of Hades which Yeats knew to be the heralds of rebirth from his reading of Eugenie Strong’s *Apotheosis and After Life.*” 118）と述べている。ストロングは、イギリスの考古学者であり、美術史家あり、『神格化と来世』はローマ帝国の宗教と美術に関する講演集である。また、『イェイツと妻ジョージの蔵書』（*The W. B. Yeats and George Yeats Library*）には、エドワード・ギボン（Edward Gibbon）の『ローマ帝国衰亡史』（*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*）があり、イェイツがローマ帝国に深い関心を持っていたことを示している。

ストロングは、次のように述べている。「ブタベストのナータスのお墓の上に見られるように 2 羽や複数の戦う鶏は、しばしば好戦的で警戒心の強い本能の象徴として説明がされる。...概して、後期の墓石の戦う鶏には、より深い意味が込められている。鷲が逝去した君主の魂とされたように鶏は、死んだ兵士の魂の具現化としてふさわしいものとなった」（“Two or more fighting cocks, as on the grave of Nertus at Buda-Pest, are sometimes explained as emblems of combative and watchful instinct . . .. Just as the eagle may originally have been looked upon as the habitat chosen by the soul of a dead monarch, so it has been pointed out that the cock might be appropriately regarded as embodying the soul of a departed warrior.” 215）。墓石上の鶏は、亡くなった戦士の魂の表象である。

また、彼女は、次のように述べている。「しかし、この後期ローマの墓石における鶏の大流行は、私は、多分、このせいだと思っている。日の出の前触れとされる鶏は、容易に再生と復活の象徴へ移行したからである」（“But the great vogue of the cock on later Roman tombstones is due, I think, to the fact that as herald of the sun he becomes by an easy transition the herald of rebirth and resurrection.” 5）。「ビザンティウム」の時を告げる雄鶏は、再生と復活の使者である。

５．「ビザンティウムへの船出」と「ビザンティウム」―イェイツの人生

「ビザンティウムへの船出」は、イェイツが、61歳の時に書き始められ、翌年の1927年に完結をした。私生活では、1917年、52歳のイェイツは、長い独身生活に終止符を打ち、30

歳年下のバーサ・ジョージ・ハイド＝リーズ（Bertha George Hyde-Lees）と結婚をした。1919年には、長女アン（Ann）が誕生し、「我が娘のための祈り」（“A Prayer for my Daughter”）（「マイケル・ロバーツと踊り子」*Michael Robartes and Dancer*, 1921所収）を詠んでいる。

「我が娘のための祈り」の第 1 連で、イェイツは、次のように自己の心を表している。拙訳を付す。

A Prayer for my Daughter
Once more the storm in howling, and half hid
Under this cradle-hood and coverlid
My child sleeps on. There is no obstacle
But Gregory’s wood and one bare hill
Whereby the haystack-and roof-levelling wind,
Bred on the Atlantic can be stayed;
And for an hour I have walked and prayed
Because of the great gloom that is in my mind.

またしても、嵐は吠えている。
我が娘はこの揺り籠の幌と掛け布の半ば陰に
すやすやと眠っている。大西洋上に発生した嵐を遮るのは
グレゴリー家の森と裸山の一つだけである。
干し草の山や屋根を吹き飛ばす風
そして私はこの一時間、歩き、祈った。
なぜなら、娘を思い、心がすごく滅入るのだ。

1921年には、長男マイケル（Michael）が誕生し、「我が息子のための祈り」（“A Prayer for my Son”）（*The Tower*, 1928）を発表している。イェイツは、1922年、自由国となったアイルランドの上院議員となる。イェイツは、その間の充実した気持ちを「学童の間で」（“Among School Children”）の第 1 連で、「子供たちは、/ ほんの束の間、いぶかしげに目を向ける。/ にこにこ顔をしたこの60歳の役人に（“the children’s eyes / In momentary wonder stare upon / A sixty-year-old public man”）」と書いている。1923年には、ノーベル文学賞を受賞し、アイルランドの内外に名声が高まった。「ビザンティウムへの船出」が書かれた1926年、1927年は、まさにイェイツは、公人としても、私人としても、充実した明るい日々であり金の鳥は、その表象である。

1928年 9 月、イェイツは、63歳で、アイルランド自由国の上院議員を辞任した。私人になったイェイツは、1930年 1 月イタリアの保養地ラパロ（Rapallo）で大病になる。マルタ熱と診断され、治療がされた。フローレンスから、昼夜付き添いの英国人の看護婦が雇われ、 4 月の始めにようやく快復した（“Through January 1930 WBY lay ill in the Rapallo flat. The Malta fever was confirmed by blood test. . . . An English night nurse was hired from Florence . . . until early February, when his temperature finally abated.” *Life II* 395）。

大病から快復した65歳のイェイツは、この世に生還した喜びで「ビザンティウム」の詩

を完結させた。金の鳥は、イェイツの再生の使者であり、再生の表象である。

おわりに

金の鳥は、イェイツの死生観の表象である。「ビザンティウムへの船出」と「ビザンティウム」の詩には、共にその題名にビザンティウムの語が使用されているので二つの詩は対を成すとする説が多い。しかし、金の枝に止まって鳴く金の鳥の表象は、二つの詩において大いに差異が存在する。ギリシャの金細工師によって作られた金の鳥は、眠っている皇帝を目覚めさせるという点では、中国の皇帝の病気を癒したアンデルセンのナイチンゲールと類似している。イェイツの魂は、金の鳥となって、ビザンティウムの貴族たちや、貴婦人たちに、過去のこと、現在のこと、未来のことを歌って聞かせる、と詠んでいる。公的、私的にも充実した生活を送っていたイェイツの死生観は、静かな、明るい、平和な世界における魂の永遠性である。

「ビザンティウム」の金の鳥は、私人になった後、保養先のイタリアの地で大病から生還した再生の表象である。金の鳥は、星や月の光に照らされて、冥界の雄鶏のように時を告げる。不滅の金を讃美し、この世の鳥、この世の花びらを、この世のすべての錯乱を嘲笑する。金の鳥は、現実を直視し、積極的に現実に立ち向かう再生の使者である、イェイツの現実に生きる死生観は、「ビザンティウム」の詩を発表した1930年から、死去する1939年までの期間、多くの作品を発表している活躍が示している。

二つの詩に登場する金の鳥の表象が異なることは明白である。「ビザンティウムへの船出」の金の鳥は、魂の永遠性の表象であり、「ビザンティウム」の金の鳥は、肉体の復活と再生の表象である。金の鳥は、イェイツの死生観の変化を如実に示している。

Works Cited

Bloom, Harold. *Yeats*. Oxford UP, 1970.
Brown, Terence. *The Life of W.B. Yeats: A Critical Biography*. Blackwell, 1999.
Foster, Roy. *W.B. Yeats. A Life II: 1915-1939*. Oxford UP, 2003.
Gibbon, Edward. *The Decline and Fall of the Roman Empire.* Edited with an Introduction by Dero A. Saunders. Penguin Books, 1985.
Jeffares. A Norman. *A Commentary on the Collected Poems of W.B. Yeats.* Macmillan, 1968.
…, *A New Commentary on the Collected Poems of W.B. Yeats*. Macmillan, 1984.
Keats, John. *Selected Poems*. Edited with an Introduction and Notes by John Barnard. Penguin Books, 2007.
Strong, Eugenie. *Apotheosis and After Life: Three Lectures on Certain Phases of Art and Religion in the Roman Empire*. Constable and Company 1915.
Snukal, Robert. *High Talk*: *The Philosophical Poetry of W.B. Yeats.* Cambridge University Press, 1973.
Wolfson, J. Susan. "Yeats' s Latent Keats / Keats' s Latent Yeats". *PMLA, vol. 131. pp. 603-21*, 2016.
Yeats, William Butler. *Autobiographies*. Macmillan, 1955.
---. *The Collected Works of W.B. Yeats. Volume II, The Plays.* Edited by David R. Clark and Rosalind E. Clark. Palgrave, 2001.
---. *The Collected Poems of W.B. Yeats*. Edited by Richard J. Finneran. Simon & Schuster, 1996. …, *The Letters of W.B. Yeats*. Edited by Allan Wade Rupert. Hart Davis, 1954.
---. *The Various Edition of the Poems of W.B. Yeats*. Edited by Peter Alt and Rusell K. AlSPACH. Macmillan, 1957.
---. *A Vision*. Macmillan, 1992.
---. and Thomas Sturge Moore. *W.B. Yeats and T. Sturge Moore; Their Correspondence 1901-1937*. Edited by Ursula Bridge. Greenwood Press, 1978.
柿原妙子「機械仕掛けの鳥は歌う："Sailing to Byzantium" とオートマタの芸術論」、『イェイツ研究』No. 48（2017）、17-31頁。